

## 「祈る人」ホーキンス先生

### 第 1 部 日系人収容所における働き

### 第 2 部 ホーキンス先生の贈り物

中 根 淳 子

#### 緒言

我が名古屋柳城短期大学の初代学長は、カナダの宣教師、フランセス・ベル・ホーキンスであることは誰もが知っているだろう。しかし、ホーキンス先生（敬称をつけるのは長い習慣のため、文中でもこのように記載）がどのような人柄であったのかを知る人は少ないのではないかと。私もその一人であったが、半世紀以上の年月を経て、私はホーキンス先生と出会ったように感じ、それについては柳城学院百年史208ページに述べている。

ホーキンス先生は70歳になっても心身の健康状態は良好で、十分学長職を遂行できたが The Missionary Society of the Church of England in Canada（カナダ聖公会伝道協会、以後文中 MSCC と記載する）からの召還命令により、故郷のハミルトン市に戻った。その後、1973年、創立75周年に同窓会の招待により来日している。82歳というご高齢にもかかわらず来日したその理由は、出会った子どもや学生一人一人に最後のお別れを言うことであった。懐かしい日本に行きたいという理由ではなく、出会えたことへの感謝を伝え、健康と未来を祈る気持ちであったのだろう。

私は『柳城学院百年史』の執筆・編集に参加して以来、ホーキンス先生に関して調べてみたいと考えていることがあった。第二次世界大戦中、戦局悪化により、ホーキンス先生は、MSCC から一時帰国を命令されるのだが、実際の帰国は、真珠湾攻撃（1941年12月8日；日本時間）の8か月前の4月で、もっとも遅く帰ったカナダ人の一人であることが知られている<sup>①</sup>。さらに故郷のハミルトン市にいたのはわずか7か月で（巻末年表参照）、すぐに、日系人の強制収容所で子どもたちのために働き始めたのである。しかし、この詳細に

ついては知られておらず、ホーキンス先生の人柄を示すエピソードとして語られていただけだった。ホーキンス先生は記憶力や文章力に優れ、本学の教育や幼稚園での働きについてカナダに書き送った詳細な報告書（リビングメッセージ）が多くあり、それらを読むと当時の情景がありありと浮かんでくるほどである。しかし、収容所での働きについては現地から本国の MSCC に報告書が送られているだけだったため、日本国内では活動の詳細が知られていなかった。

ところが、2003年ホーキンス先生の大姪<sup>註1</sup>、ダイアン・ディストラーさんが、創立105周年の主賓として来日した際、持ってきてくださった資料に収容所で幼稚園を立ち上げる‘set up’という記述があり<sup>②</sup>、やはり早急に調べなければならないと感じた。その後、カナダの聖公会アーカイブの協力も求め、関連の資料を探した。日系人収容所でのホーキンス先生の働きについては、第1部で報告したい。

ホーキンス先生の人柄は、創立100周年に発行した『思い出』の中の卒業生の記述にも如実に表れており、祈る人であり、行動力があり、誠実な人であった<sup>2)</sup>。ホーキンス先生の学生への愛情の現れの一つをこの夏、私は目で見、触れることができた。第2部の「ホーキンス先生の贈り物」は今回の中心部であるのだが、あえて後半部に記述してある。そうしないと第1部をお読みいただけないのではないかという危惧からである。

なお、私自身が歴史研究家でないうえ、今回の第1部の現地調査は行っておらず、資料からの報告にとどまっている。歴史資料として使用するにはさらなる調査が必要と思われる。今回はホーキンス先生のお人柄を表す記述として取り扱ってい

注1 ホーキンス先生の兄弟 George の孫に当たる。

ただければと思う。

ホーキンス先生の生涯を年表形式にして巻末に添付した。特に、年表作成で参考にした資料と文献は出典が明らかではないものも含まれているため、通常の文献引用のスタイルとはらず、文献番号・記号を文中に示し、巻末の一覧を参照する形にしたことをお許しいただきたい。

## 第1部 日系人収容所における働き

### 1. 日系人強制退去の概要

カナダでは、盧溝橋事件（1937年）を契機に日中戦争が拡大したところから、それまで細々とくすぶっていた排日感情が次第に盛り上がり始めていた。そして真珠湾攻撃後、カナダは対日宣戦を布告、さらに同年12月25日、カナダ人が大半を占めていた連合軍防備隊が香港での対日戦で降伏したことによって、日系人に対する排日感情は最高潮

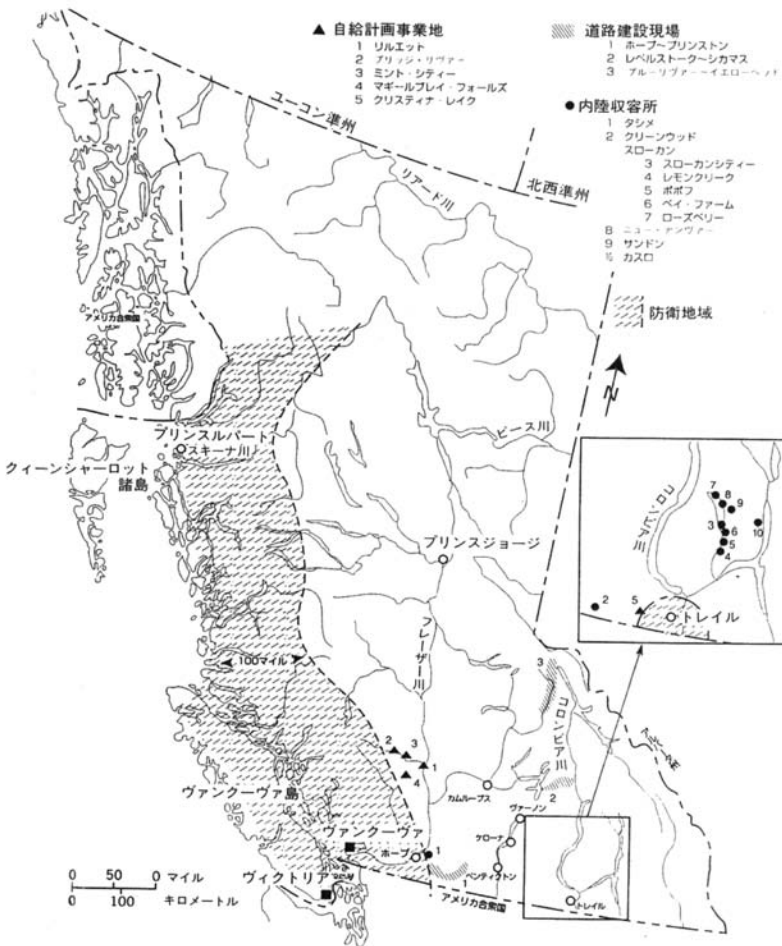
に達した<sup>4)</sup>p.105。特に British

Columbia 州（以下文中では BC と記載）の日系漁民が海岸線の地図を日本海軍に引き渡すのではないかという疑いが持たれ、開戦後すぐに漁船は押収された<sup>5)</sup>p.255。1942年1月16日には最初

に内閣令 P・C・365号として18歳から40歳までの徴兵年齢に相当する日本国籍の男子が BC 沿岸100マイル以内の「防衛地域」からの退去命令が出された<sup>4)</sup>p.105-106。同年2月15日、シン

ガポールが陥落すると排日感情はさらに煽られ、2月24日、女子や子どもも含む日系人約22000人すべての退去命令、内閣令 P・C・1486号が出た<sup>4)</sup>p.105。インターネットでも、それらの内閣令を見ることができる<sup>注2</sup>。

British Columbia Security Commission（ブリティッシュ・コロンビア保安委員会：以後文中 BCSC）がこれらの立ち退きを監督、指導した<sup>4)</sup>p.106。BCSC はキャスロー、スローカン・シティなどのゴーストタウンに日系人を収容しようとしたが十分な家屋を確保できず、内陸部ローズベリー、ニュー・デン



出典) Roy Miki and Cassandra Kobayashi, *Justice in Our Time: The Japanese Canadian Redress Settlement*, 1991.

図1 BC州の日系人移動先

引用：飯野正子『日系カナダ人の歴史』東京大学出版会、1997年、110頁

注2 [http://www.najc.ca/thenandnow/jp/experiencec\\_firstorder.php](http://www.najc.ca/thenandnow/jp/experiencec_firstorder.php)  
[http://www.najc.ca/thenandnow/jp/experiencec\\_removal.php](http://www.najc.ca/thenandnow/jp/experiencec_removal.php)  
 全日系カナダ人協会 The National Organization in Canada (NAJC) ホームページ、  
 2008年9月8日閲覧

バー、タシメ(後述)などに抑留キャンプを急設した(図1参照)<sup>5)</sup>p.231。1942年3月から6月までの間、退去させられた男性は道路建設や砂糖大根栽培、森林伐採に従事させられたが、1942年、秋までには各地の強制収容所に移動して家族と合流することが許された<sup>7)</sup>。しかし、中にはオンタリオ州のアングラやピータワワ捕虜収容所に終戦まで収容されたものもいた<sup>7)</sup>。BC内陸部へ向けての移動にはバンクーバーから特別列車が仕立てられ、1942年の春から夏にかけて、行きは日系人で満員、帰りは空という異様な光景が見られたという<sup>6)</sup>p.69。

日系人の不動産や財産はCustodian of Japanese Property(日系人資産管理局)に一任されたが<sup>4)</sup>p.106、それらはすでに1943年から所有者の許可無く管財人によってオークションなどで売却され、収益は持ち主に返却されることはほとんどなかった<sup>4)</sup>p.112, 5)p.254-256。

1945年2月、再びカナダ政府は、BC全土から日系人の退去を命じる通達を出した<sup>4)</sup>p.116-117。日本へ国外追放されたものも約4000人いたが、大半はロッキー山脈より東側、オンタリオ州、ケベック州、プレーリー(サスカチュワン州)などに再度移住しなければならなかった。「東部」‘East’への移住が始まり、この頃からいくつかの収容所が閉鎖され始めた。日本へ帰った(追放された)ものが少なかったのは、当時日系人の75%がカナダ生まれか帰化して市民権を持っており、自らがカナダ人という意識が強かったからである<sup>8)</sup>。東部への移住は、移動先にとっても日系人にとっても受け入れがたいもので、時間を要した。当時、日系人は財産を奪われ、土地を購入する権利もない状況だった<sup>4)</sup>p.116-120。この強制退去の通達は戦後、1947年に廃止され、1949年4月、ようやくカナダのどの地域でも住むことができる自由を回復した<sup>8)</sup>。

その後、漸次、没収された財産の補償、強制収容による給与の損失の補償がなされた。Brian Mulroney 首相(ブライアン・マルルーニー第24代首相)による正式な謝罪は1988年のことであ

たが、これらの謝罪や補償に至るまでには日系カナダ人が組織するNational Association of Japanese Canadians(NAJC:全日系カナダ人協会)の大きな弛まぬ人権回復、人種差別撤廃のための活動があった<sup>8)</sup>。

## 2. ホーキンス先生バンクーバー島へ

ホーキンス先生がカナダ帰国後、カナダのバンクーバー島に向かったのは1941年、11月1日、50歳の時である。1941年4月に帰国し、わずか7か月後のことである。これまではホーキンス先生が帰国後ゆっくりすることもなく自ら志願してそこに行ったと解釈されていたが、ホーキンス先生は日本語のみならず幼児教育に精通していたことから、The Women's Auxiliary(婦人伝道補助会:以後文中ではW.A.と表記)<sup>⑦, 3)p.41, ⑩</sup>とProvincial Board of Missionsがカナダの日系人のために働くことを要請したのである<sup>a</sup>。ホーキンス先生とハロビン先生(Miss Horobin)<sup>⑩</sup>は、コロンビア教区のSexton 主教に要請され、1941年の終わりにバンクーバー島のポートアルバーニへ派遣された。このときはまだ、強制収容の内閣令は出ておらず、バンクーバー島には日本人が散在し、二人は早速幼稚園、日曜学校を始めている<sup>a</sup>。1942年3月に書かれた資料からは日本語、英語の聖書クラスを作ったり、中学やメンズクラブ、他の宗派の教会にも出向いて日本のことや宣教活動について話をしたりしている。この年の2月に前述した内閣令が相次いで出たため、二人は残された家族への援助を決意している。幼稚園の子どもたちは落ち着きがなく睡眠不足であることを見て取っている<sup>b</sup>。退去の意味がわからず「バンクーバーに行って、すてきなうちに住むの」という子どもの言葉に胸を痛め、さらに祈りを深めている。去っていく日系人には、自分自身が‘home’と感じている日本を離れてきた体験を元に、神の導きがあること、どこにいても教会が共にいることなど、勇気づけるメッセージを送っている<sup>b</sup>。3月18日には日曜学校に引き続き、幼稚園も閉めている<sup>c</sup>。

注3 『柳城学院百年史』138-139、166-167ページ参照。柳城幼稚園、瑞穂幼稚園、御器所幼稚園の園長経験者であり、1959年からのホーキンス先生休暇の際は学長代理を務めた。



同年、3月25日にはポートアルバーニを出てバンクーバーに到着している。バンクーバーのヘースティング公園（National Exhibition at Hastings Park）内の家畜小屋には収容所へ移されるまで待機している日本人が詰め込まれていた<sup>c</sup>。ホーキンス先生はそこでポートアルバーニの多くの家族と再会している。そこでもホーキンス先生は中山司祭とともに若い日系人のために英語の礼拝に協力したり、BCSC委員会の許可を取って United Church（以後文中カナダ合同教会と表記<sup>5</sup>）と共働で幼稚園を始めている。また年長の女子の J・O・Y（Jesus first, Others second, Yourself last の意味）クラブを作り、クラブの子どもたちは幼稚園の子どもへの奉仕もしている。

その後、正確な日時はわからないが、Tashme（日本語表記ではタシメと書かれている文献が多く、以後文中ではタシメと表記）から最初に書き送った手紙が1943年10月に書かれ、前の手紙から

1年以上たったと述べているので、おそらく1942年、夏から秋にかけてタシメに行ったと思われる<sup>d</sup>。このとき、ミス・ハロピンはスローカン・シティの収容所に派遣されている<sup>d</sup>。ホーキンス先生と同行したのはウォーカー先生（Miss Walker）<sup>注4</sup>である。

### 3. ホーキンス先生タシメへ

#### ① タシメの位置

タシメは地名としては登録されていない。実はタシメは BCSC のメンバー 3 人の頭文字であり、収容所の名称としてつけられた。ホーキンス先生は常に緻密であり、“It is composed of the first two letters of the names of three men who had to do with the B. C. Security Commission, — Taylor-Ta; Shirras-Sh; Meade-Me.” と記録している<sup>i</sup>。ホーキンス先生の手紙はおよそ70年後に私が調べることを知っていて詳しく書いてくれた



写真1 日系人収容所、タシメ（人口2500）、1942年  
写真提供：カナダ聖公会アーカイブ

注4 『柳城学院百年史』138ページ参照。瑞穂幼稚園、御器所幼稚園の園長も務められた。

かのである。図1を見ると、タシメはBC南部で、100マイルの防衛地域からちょうど外れたところである。ホーキンス先生もその位置について詳述しているが、ホープ(Hope)町の東、Hope-Princeton Highwayを東に、直線距離ではなく14マイルのぼったところである<sup>g</sup>。ホーキンス先生はさらにタシメの標高について触れ、ホープ町より2200フィート(約670メートル)も高いと述べている。

タシメについて書かれている資料はどの資料も「もっとも隔離された場所」「悪名高い」などという表現があり、それは都市へのアクセスが非常に悪かったことや、冬期の寒さに起因するのだらう。

## ② タシメにおける日系人の生活

今回カナダ聖公会アーカイブの協力を得て、入手した資料は写真3枚のほか、タシメの様子をMSCCに書き送ったホーキンス先生自身の手紙7通、そのうちハロビン先生と一緒に書いたものが3通、そのほか5編の報告書などである。どの資料からもタシメの生活が伺える。

1943年10月にタシメについて書き送った手紙にはタシメの位置の他、景色についても詳細に書かれている<sup>g</sup>。他の資料にない特記すべき事柄は、その景色の美しさを記述していることである。山並み、深い森の美しさ、四季の変化、流れ下る小川、滝のしぶきの感触を語り、野生の花々を愛でている。しかしその美しい記述の後でタシメ収容所が見えてくるところを“Then in the distance a shadowy something under a pall of smoke — Tashme.”と重く、暗い表現で述べている<sup>g</sup>。

その手紙には、タシメの環境と日系人の生活が細かく報告されている。タシメは収容が遅れていた2500人を入れるための施設として作られた<sup>e:p.2174</sup>。入り口に製材所があり、以前牧場だったため「14マイル農場」の看板がまだかかっていた<sup>g</sup>。「雄牛に注意」という札もあちこちに掛かっている。騎馬警察官(Mounties)、スタッフ、トラック運転手のための白人用食堂、多くの丸太小屋、納屋、農場の建物、荷物置きのための茶色のテント(後に片付けられる)、会議用の白いテント、大きな家畜小屋、雑貨屋、郵便局、BCSCの

事務所、福祉事務所、靴修理屋、床屋、騎馬警察官の事務所、日系人男性用食堂、幼稚園になっている飯場など入った順に紹介している<sup>g</sup>。写真1からは、どの位置が入り口かはわからない。幼稚園のそばには何本かの常緑樹による唯一の日影があると記述されていることから、幼稚園は写真左の木の下にある建物のうちの一つと思われる。幼稚園にはブランコが2台あった。パン屋や肉屋なども整備されつつある(1943年10月当時)<sup>d</sup>。

収容者の家は写真1からもはっきり見て取れる。バラックの手前の大きな通りは「タシメ通り」と呼ばれ、それに垂直に10本の小路があり、1番街、2番街などと名付けられていた<sup>j</sup>。

資料gには家の造りも詳述されている。使用している木材は幅1インチ、防水のためと思われるタール紙を張った屋根が付いている。ほとんどの家が間口26フィート(約8メートル)×奥行き16フィート(5メートル弱)で、8フィート(約2.5メートル)四方の部屋(著者注:日本の4畳半よりやや小さいくらい)が4つ、10フィート(約3メートル)×16フィート(5メートル弱)の居間が中央に一つあり、一軒で8人用と考えられ、ほとんどの家が2世帯で使用していた<sup>e,g,j</sup>。台所とストーブがあり、木製テーブルやいす、2段ベッドやダブルベッドなども入居者に応じて備えられた。水は川からパイプで供給されたが、蛇口は屋外に4軒の一つ(のちに収容者の中の水道工事屋が各家に給水できるようにした<sup>5)</sup>)の割合であった。春と夏の間、入居者はほとんどがレタスやグリーンピースなどを育て、スイートピー、ノウゼンハレン(著者注:赤や黄色のカラフルな花)、ストック、モクセイソウなど美しい花壇を作っていたとあり、つらい収容所生活の中の心身両面の支えになっていたのかもしれない。

ホーキンス先生の資料には記述がないが、一度に30人ほど入れる共同浴場が5か所、洗濯場が1か所あった。便所(汲み取り式)は屋外で4軒の一つしかなかった。便所の清掃、石灰撒き、肥の汲み上げ、風呂掃除も仕事としてBCSCが収容者に低賃金を払って実施していた<sup>5)p.242</sup>。

騎馬警察や医師、看護婦やその家族の住むアパートは川の対岸にあった。このアパートや病院には収容所内の発電所から電力が供給されてい



写真2 幼稚園卒園式 後列左から Rev. Gale、Rinko Kojima (teacher)、Miss Ryan (United Church missionary)、Mae Walker (Anglican teacher)、Frances Hawkins (Anglican teacher)、Mrs Kimura (teacher)、Helen Bailey (Anglican missionary) タシメ、BC、1941年 写真提供 カナダ聖公会アーカイブ

た<sup>e</sup>。

大きな納屋の1階部分は、茶色のテント内にあった荷物の収納場所にされ、2階部分が学校に使用される予定と書かれている。そこは映画、体育などのレクリエーションの場として活用されていた。そのほかの納屋は独身男性か単身男性のアパートとして使われていた<sup>g</sup>。

収容者は、生活必需品を前述した店であらかじめ購入したクーポン券を使用して調達した<sup>e</sup>。生鮮食料品は週に一度送られてくるが、いつも長蛇の列ができていた<sup>d</sup>。店は白人が管理していた<sup>e</sup>。タシメは当初2500人規模だったうえ、多い時期は3600人だったので<sup>5)p.240</sup>、収容所内での雇用も発生し、日系人も事務員や教師、会計士、道路工夫、大工などとして雇われた<sup>e</sup>。子どもたちは伐採作業や道路工事、家屋の建築などを目の当たりにしたことにより、都会にいては経験できないことを学ぶ機会も多かったと述べている<sup>j</sup>。

当初、BC州政府は教育費の出費も拒否し、どの収容所も学校の建物はなく教師もいなかったが、カナダの憲法によってカナダ市民への最低教育が保障されていることへの考慮、拒否を続けること

による日系人の不満の噴出や日系人の教育に協力している教会の離反などをおそれ、連邦政府の資金によって初等教育（8年間）のみ費用が支給されるようになった<sup>5)236-237, 6)p.84</sup>。1942年10月、BCSCの教育計画が認可、収容所で施設の建設が始まり、授業も12月に開始された。1943年4月5日からは、スローカン・シティでも遅れていた小学校教育が始まったと書かれている<sup>d</sup>。高校教育に関してはカナダ政府は責任を持たず、キリスト教の教会が中心となって行った<sup>5)p.248, 6)p.84</sup>。タシメでは、1944年前後の事柄を報告した手紙<sup>h</sup>においても、ハイスクールの校舎はなく、個人が通信教育コースにより資格を確保し、教会が中心となって同じカリキュラムの授業を行ったが十分ではなかったという<sup>i, 5)p.248</sup>。

また、収容所から4マイルまでの外出は許可されていたが、その先に行く場合は、連邦警察RCMPの許可が必要だった。車の使用は当然禁止されていた<sup>e</sup>。バンクーバーからの新聞は毎日無料で配布された<sup>f</sup>。

時折、鹿や野生の山羊、熊、コヨーテを見かけたりした。大人も子どもも森でキノコ取りを楽し



んだり、ハイキングや、山登りをしたり、収容所の敷地内で野球をしたりして余暇を楽しんだ。冬期はスケートもできた<sup>j</sup>。多くの人々が木彫りに熱中した<sup>j, 5)p.243</sup>。

資料hは1945年1月に掲載されたものなので、前年の秋頃に書いたものと思われるが、冒頭部分に、1944年1月末にタシメ内の新しい家に引っ越したと書かれている。それまでは、BCSC 委員会が建てた小さな家をカナダ合同教会の宣教師2人と聖公会宣教師3人が共有し、快適さとはほど遠かったようだ<sup>i</sup>。ホーキンス先生とウォーカー先生の新しい家は、タシメのすぐ入り口にある丸太小屋で、以前は白人用の食堂だった。ワンルームで垂木が見えていたが、天井とパーティションをつけ、寝室、居間、キッチンができた。洗面所や湯を沸かすことができるストーブ、シャワーがあったと書かれている。若い日系人女性が食事や掃除などを引き受けてくれたので仕事に専念できた<sup>h</sup>とある。

### ③ ホーキンス先生の活動

#### ● 幼稚園

タシメでの幼稚園開園の正確な日にちは不明だが、タシメの聖公会ゲール司祭<sup>注5</sup>の手紙である資料dには1943年3月、バンクーバーのヘースティング公園収容所に最後まで残った結核患者や看護スタッフが新しくできたニュー・デンバーの病院に収容され、1年以上に及ぶ「人溜まり」が解消されたと述べ、それに引き続いて『タシメにはもっと施設が必要である』ことを述べ、さらに『もうじきホーキンス先生とミス・ウォーカーが、カナダ合同教会 所属の若い日本人女性を助手にして幼稚園を始める』とあるので、1943年の春、4月頃には、前述した木立のそばの飯場で開設していたと思われる。幼稚園の費用は教会が負担し、無料であった<sup>5)p.248</sup>。写真3はホーキンス先生が幼稚園の子どもと一緒に写した写真である。写真4のピクニックの写真の表情とは違ってにこやかである。残念ながらこの写真は送られた資料gか



写真3 ホーキンス先生と幼稚園の子どもたち  
The Living Message, vol.55,no.1,Jan. 1944,p.6 より

らの引用で画質がよくない。

ホーキンス先生が、1944年前後に書いたと思われる手紙では、幼稚園の子ども数が114人、小学生60人、高校生160人くらいと書かれている。人数は、移動が多く流動していた。ゲール司祭の1945年6月に掲載された報告には、名簿上、241名、前年の6月には卒園生116名となっている<sup>k</sup>。1945年のホーキンス先生の手紙には、1944年11月に始まった幼稚園のクリスマス準備について書かれている。聖劇の練習をしていること、子どもたちのお気に入りの歌についても触れている。12月にはクリスマスカードが入った箱や飾り付けの材料、キャンディーなどがトロントの支援団体から送られてきたことなどについて書かれ、それらを子どもたちに渡せるように準備しているときの楽しい時間について触れている。それは、プレゼントを受け取る子どもたちが「どこかで誰かが自分たちのことを覚えていてくれる」と感じられるからだと述べている。このようなところにもホーキンス先生の子どもたちに対する愛情が表れている。園児の母親たちもプレゼントの包装、ツリー

注5 William Henry Gale. 文献3) p.147にも記載がある。写真2の後列左の方。当時、60歳を越えていたか。1912年から32年まで日本で働き帰国。J.C. ロビンソン著、大江真道訳『日本聖公会中部教区・資料叢書(二) カナダ聖公会・宣教師の伝道—東方の帝国の島 6、7章—』日本聖公会中部教区歴史編集委員会、1982年の巻頭写真の中に、1913年当時の若いゲール司祭が写っている。1955年に逝去。

の飾り付けやキャンディーボックス作りなどを手伝った。

クリスマス会は終業式の12月22日に行われた。子どもたちは羊飼いや賢者になってかわいらしく劇を演じた。ホーキンス先生は、日本の幼稚園とほとんど同じようにタシメの幼稚園を運営していたようである。これはホーキンス先生の、どこにいてもどんな環境でも「同じ子ども」であるという考え方の表れであろう。

幼稚園のみの活動に触れている箇所は少ないが、子どもたちはタシメで道路工事や伐採、大工仕事などを見ているので、幼稚園で工作するときは、よく粘土を木材運搬のトラックに見立てて作り、最後には丸太を乗せ、鎖で固定したことが書かれている<sup>j</sup>。しかし、そのようなことをほほえましく思う一方で、ホーキンス先生は幼稚園の子どもたちが電車やボートを見ることができなかったり、都会にある商店街を知らないのを気にしている。また、タシメではBCSCが豚を飼育していたが、牛は飼っていないだったので、ある日、子どもが絵を描いて「先生、牛はしっぽからミルクが出るの？」と聞いた。ホーキンス先生は、子どもたちが隔離された場所で生活する弊害を心配している<sup>g, j</sup>。

#### ● 婦人集会

資料hにホーキンス先生の新しい家で、毎週開催していたとあるが活動の詳細は不明。

#### ● 日曜学校

日曜学校は聖公会だけでなく、カナダ合同教会や仏教のものがあり、聖公会の日曜学校には250人の子どもが参加していた<sup>j</sup>。日曜学校は、カナダの他の場所で行われているものと授業や教材は同じであった。内容に触れているものはわずかで、北極地方や中国、インドの伝道に関する授業をしているとあった<sup>j</sup>。年少の子どもたちの日曜学校は幼稚園の建物で行われていたが、他は小学校の教室で開催されていた。新保は『幼稚園は宗教色はなかった』と述べているが、日曜学校は主宰している宗教に応じて宗教色の濃いものであったことが想像される<sup>5) p. 249</sup>。

1944年のクリスマスの活動が書かれている手紙

では、日曜学校の教師は12人と書かれている。映画を上映したり、サンタクロースに扮した監視人が子どもたちにプレゼントをしたりしたようだ。年齢に応じていくつかのクラスに分けられていたようである。

そのほか、男子にはボーイスカウトとカブスカウトがあり、女子にはガール・スカウト (Girl Guides) の活動があった。タシメではこれらはコミュニティが運営していたが、多くの指導者は教会員だったという<sup>k</sup>。ボーイスカウトは川のそばの森でキャンプしたり、森林生活の知識・技能を学んだりした<sup>j, p. 201</sup>。この活動は、自暴自棄になりやすく荒みやすい少年たちの心を支え、将来にも良い影響を及ぼしたという<sup>5) p. 249</sup>。

#### ● Junior W. A.

1944年頃のことについて書かれたホーキンス先生の報告には25人から30人の Junior W. A. (ジュニア女性伝道補助会) があると書かれている。北極について勉強し、北極地方にある学校に送るギフトボックスを作成していることが書かれている。ホーキンス先生は何らかの形でこの活動にも関与していたと思われる。

資料kには当時、ミス・タッカー<sup>注6</sup>が中心となって Junior W. A. を作り、60人のメンバーを2つに分けて運営していたとある。W. A. の30人は Dorcas Work (衣服を作って生活困窮者に提供する) やその他いろいろな形で教会を助けていた。この中からは W. A. に志願して勉強の傍ら日曜学校の手伝いをしているものもいた<sup>k</sup>。

#### ● 英語とカナダの習慣クラス

12～13人の年配の女性たちがホーキンス先生にお願いして開かれた教室である。1944年に依頼され、1945年1月の手紙には、17名の参加があり、参加者が熱心で、大変よい教室になったと述べている<sup>h, i</sup>。リーディングや、英会話、合唱などをしていた。

#### ● 教会の仕事

##### ◇ 礼拝

タシメには教会専用の建物はなく、幼稚園と共有していた。ホーキンス先生はゲール司祭による礼拝や洗礼・堅信式などを女性執事として助けて

注6 文献3) p.156参照。1931～1934年、日本で勤務。戦後収容所での働きがカナダ政府から表彰されている。



いた。資料eによると、ゲール司祭は週に一回タシメを「訪れて」礼拝をしていたとあり、日常の教会の管理はタシメに常駐していた女性宣教師たちが担っていたのではないだろうか。

クリスマスには日本語・英語の正餐式、小学生のための礼拝、日曜学校の子どものための礼拝があったと記述されている<sup>i</sup>。四旬節には毎週木曜日に特別な子どもの礼拝を行っており、ホーキンス先生はたくさんの子どもの参加を希望している<sup>j</sup>。



写真4 MSCC 日曜学校教員ピクニック、タシメ、1945年

タシメでの洗礼・堅信については数か所の記述があり<sup>j</sup>、明確にその準備クラスを担当していたと書かれてはいないが、おそらくゲール司祭を助けて何らかの関与をしていたのではないかとと思われる。なぜなら、1943年3月の同司祭の記述では Miss Biley が洗礼・堅信の準備クラスを始めた<sup>k</sup>とあり、また1944から1945年頃の報告の中にスローカン・シティでミス・ハミルトン<sup>注7</sup>とミス・クレンチ<sup>注8</sup>が Savary 司祭を助けて同様のクラスを担当していると記述があり、婦人宣教師たちがそれらを主に担当していたからである<sup>k</sup>。また、ホーキンス先生が1944年頃の活動報告として書いた手紙の中には12月に新しい家の家事を手伝っている日本人女性が洗礼を受けたという記述があり、その準備にはホーキンス先生も関与していたと考えてよいのではないかと<sup>i</sup>。

#### ◇聖書教室

タシメでの記録はないが、1942年、3月に書かれた手紙に、ポートアルバーニではホーキンス先生とハロビン先生が2人で聖書教室を開催していたと書かれている。英語クラスと日本語クラスがあり、日本語クラスは参加者のためにゲームなどのレクリエーションも行っていた。すでに強制退去の内閣令が出た後のことである。2人のうちど

ちらが書いたものかわからないが、‘We were so glad to see them forget their worries for an hour...’と報告している。内閣令によって、子どもたちと離ればなれになるのではないかと心配で仕方なかったある女性は、その教室で「2か月分」笑ったと述べたという。そんな様子を見て二人の先生方もうれしく感じていたのだろう。このような取り組みは教会の働きに連動してタシメでも行っていたのではないかと推測される。

そのほか、ゲール司祭の報告によると、教会が子どもや収容者のために行ってきたこととして、本の貸し出しがある<sup>k</sup>。‘The lending libraries we have been able to set up...’と書かれているので、ホーキンス先生たちも関与していたと推測される。本は収容所開設当初から需要が高く、1943年3月に書かれた同司祭の報告の中で、スローカン・シティで活動していたハロビン先生が、子どもたちのために新品でなくてもよいので本をくださいという信徒への呼びかけを行ったことが記載されている<sup>d</sup>。それらの活動が実ってきたのだろう。

④ 日本で活躍していた宣教師の働き（今回の資料中）

注7 ハミルトン主教の姪、文献1）p. 140-141、3）p.148参照 3）p.146参照

注8 文献3）p.155参照

戦前、戦後に渡って中部教区で活躍し、戦後は補佐主教となった Percival Samuel Carson Powles 司祭の子息である Cyril Powles (セロ・パウルス) 司祭<sup>注9</sup>も、日系人収容者のために尽力していた。MSCC は、モントリオール教区にいた C. パウルス司祭を日系人収容キャンプに6か月間「お借りした」と記述されている<sup>注10</sup>。1945年6月掲載のゲール司祭の報告には、パウルス司祭は日系人の再度の移動先となる「東部」の視察を計画しており、それこそが日系人の受け入れのために重要なことだと若い司祭(1945年当時27歳)を賞賛している。ハロビン先生はその後、高校の商業科の教員をしている。ノラ・ボーマン先生は McGill 大学卒業の経歴、日本における W. A. の働きにより Slocan High School の校長として活躍していた。

#### 4. 資料を読んで

今回、資料を通して、カナダの日系人が当時受けた苦難を知り、今更ながら胸が潰れる思いがした。それと同時に日系人とともに歩いたカナダの宣教師たちの熱い思いと行動力に圧倒された。ホーキンス先生は苦勞をいとわないかたである。タシメでの生活はかなり厳しいものだったと想像されるが、報告書にも自分自身の辛さや苦しさは一行も書かれていない。たとえば、新しい家に住める喜びは書かれていても、それまで5人が詰め込まれていた生活には触れていない。

日系人に尽くす宣教師たちは、当時同胞であるカナダ人からもよく思われなかった<sup>6)p.76</sup>。また、宗教的な背景の異なる日系人の中で働くことは難しさがあっただろう。新保は前述したようにタシメの収容所の幼稚園教育は『宗教色はなかった』と記述し、さらに『しかし、日曜日になると、宣教師たちは学校の校舎で日曜学校をひらいた。一中略—宗教家たちは収容所内の幼子の魂が傷つけられないように細心の注意を払ったのである。』と述べている<sup>5)p.249</sup>。キリスト教の伝道を常に意識しながらも、様々な文化的背景、宗教的背景のある子どもたちに配慮しながら教育を行っていたことがわかる。その時、その場所で日系人のために尽力することがどれほど大変なことであったか想像に難くないが、日本での働きが長く、日本を‘home’と思っているホーキンス先生だからこ

そ、なしえたことではないだろうか。

ホーキンス先生が、子ども宛の手紙の中で、本当はカナダの人たち、戦争をしているすべての人たちに言いたかったこと、そして先生の日々の祈りであったと推測される部分を引用して第1部を終える<sup>注11</sup>。ホーキンス先生は、英文に冷や汗をかいていた私が、この部分で今度は涙をこらえきれなかったことをご存じだろうか。天国で笑っていらっしゃるかもしれない。

‘I wish you could know some of the boys and girls here. They are just like you and me, and you’d enjoy playing and working with them, as I do. If you ever have a chance, and you may, for some of them go East to live, please be nice to them, welcome them, and try to make them feel at home. Try to remember that they too are amongst those whom the war has driven from their homes, through no personal fault of theirs. Remember too, that they are your brothers and sisters, because we are all God’s children.’

追記：資料収集にご協力くださいました、カナダ聖公会、General Synod Archives のアーキビスト Ms. Laurel Parson さんに心より感謝申し上げます。

## 第Ⅱ部 ホーキンス先生の贈り物

1945年(昭和20年)、柳城は3月の名古屋大空襲により柳城保育専修学校、柳城幼稚園、幅下分園を焼失したが、その後、カナダ聖公会の援助を受けての復興はめざましく、1948年に、昭和区山脇町に移転していた柳城保育専修学校は1948年に再来日したフランセス・B・ホーキンスを校長とし、早くも短期大学への準備を開始していた。1950年、校名を「柳城女子学院」と改称し、現在の昭和区明月町に移転した。1953年「柳城女子短期大学」として認可され、ホーキンス先生が初代学長に任命された。『柳城学院百年史』に詳述されているが、当時ホーキンス先生は、カナダ聖公会海外伝道協会(MSCC)とカナダ聖公会婦人伝道補助会(W.A.)の相克の中に置かれ、柳城をより大きな大学にするか、あるいはそれまでの少数精鋭の教育を続けるかの選択におけるキーパーソンと

なっていた<sup>1)</sup>p.166。しかし学生から見るとまさにその時代の教育は創始者マーガレット・ヤングの意志を受け継いだ愛にあふれるものであった。

当時の学校生活は柳城学院創立百周年記念文集『思い出』に多く書かれている<sup>2)</sup>。その中でもホーキンス先生の人柄をひととき物語るエピソードがある。1959年（昭和34年）卒業、垣内久子さんの「ホーキンス先生」には次のようなことが書かれている<sup>2)</sup>p.171。

（概要）ホーキンス学長は、卒業式に着るスーツが無かった垣内さんを心に留めて、彼女のために黒のスーツをあつらえてくれた。慈愛に満ちたそのプレゼントは今も垣内さんのタンスに大切にしまわれている。垣内さんにとって「祈る人」はホーキンス先生であり、ホーキンス先生は愛である。

私がこの文を読んだのは、先に述べた『柳城学院百年史』の編纂委員をしていたときである。

ホーキンス先生に関する資料の一つとしてそれを読み、すぐにでもこのスーツを見に行かなければという思いに駆られた。しかし編集は長期にわたり、その機会はなかなかやってこなかった。今回名古屋柳城短期大学紀要110周年記念号の出版に際し、新学長の学校史編纂保存への後押しがあり、この思いを実現することができた。

垣内さんは現在、長野県の小布施町に住んでおられ、私の願いを快く受け入れてくださった。2008年8月11日、尾上明子教授、垣内さんの同級生である関俣子現理事の同行のもと、垣内さんのお宅を訪問した。垣内さんは今年72歳になられるとのことであったが、写真のように大変お元気で若々しかった（写真5）。黒のスーツはすでに私たちのためにハンガーに掛けられていた。私は、懐かしい、ずっと会いたかった友と再会したような不思議な気分になされた。スーツは想像以上に保存状態がよく、仕立てがよいので今日でも十分に着用できるほど古さを感じさせなかった（写真6）。



写真5 若々しい垣内さん



写真6 ホーキンス先生から贈られたスーツ



垣内さんは高校を卒業した後、4か月ほどP. S. C. パウルス補佐主教の元で働き、1956年、補佐主教帰国後は、小布施の新生療養所（現新生病院）で患者の看護にあたっていた。その際、柳城のことや保母資格のことを知り、入学を決意した。垣内さんは20歳であったが、この年の入学生は半数ほどが現在という社会人入学生で『思い出』の中では同年の卒業生が彼女らの落ち着いた雰囲気や実習での子どもとの関わりから学ぶことが多かったと記述している<sup>2) p.179</sup>。垣内さんは高校卒業後に父親を亡くし、聖公会信徒のための奨学金を受けていたものの経済的にゆとりが無く、また、卒業式の服装を心配してくれるような身内がいなかったようだ。1学年20名の学生について、ホーキンス先生は一人一人の心身の状態のみならず経済的な状況なども把握しておられたのだろう。垣内さんは舎監の櫛山先生に連れられて桜山にあった「タチバナ」という生地屋で採寸してもらったそうだ（写真7）。



写真7 タチバナのタグ

垣内さんを訪問した日、垣内さんと関理事はまるで短大時代に戻ったように和やかに話をしながら次々と手際よく料理を仕上げていった。手作りパンを盛るお皿には垣内さんが季節に合った紙ナプキンを選んで敷いてくれた。学生を招いて当時珍しかった洋風の手料理をごちそうしたホーキンス先生の精神がお二人の中に息づいているようであった。私たちは、垣内さんの自家製の野菜や果物をふんだんに使った心づくしの手料理をいただきながら、お話に耳を傾けた。たくさんの思い出

話のなかには、当時の卒業生が忘れたくても忘れられない『青ダルマ』（体操用のふくらんだズボン）ももちろん登場した<sup>2) p.174</sup>。ホーキンス先生は童話の講義で、学生にお話のコピーを配り覚えてくるように指示した。研究所での童話の発表の際は、関理事の「ホーキンス先生の思い出」にもあるように、腰から下のジェスチャーは品がないと厳しく注意されたようだ（ホーキンス先生は、現在の柳城生をごらんになったら卒倒されるに違いない）。寮生活は、炊事、掃除などの当番が大変だったが、時折の全国各地の実家からのお土産のお裾分けがおいしかったこと、洗濯もしてはいけない安息日の日曜日が逆につらく「寝学の時間」と呼んでいたこと、規則の厳しい生活の中でもラブレターをもらったり岐阜市の繁華街柳ヶ瀬に行く冒険を試み、あえなく失敗した勇者がいたりしたことなど昨日のこのように生き生きと語ってくださった。愛知学芸大学や名古屋大学からの非常勤講師は、皆ホーキンス先生を敬愛し、それ故に柳城が大好きだったとのことである。

そして、垣内さんは、恥ずかしそうにしておられたが、ついに黒のスーツに袖を通してくださった（写真8）。垣内さんのためにあつらえたスーツ



写真8 スーツを着た垣内さん

は今もびったりで大変よくお似合いであり、私たちは拍手喝采した。「出てこなくてはいけないものは、このように自然とみんなの前に現れてくる」とおっしゃった関理事の言葉に皆うなずいた。垣内さんは、当時のカナダの宣教師たちの働きは、その時だけのできごとではなく、今日の日本女性の地位向上にもつながっていると強く感じていらっしゃるようである。そしてホーキンス先生から与えられた多くのことを感謝の念を持って社会に還元するよう心がけているとおっしゃっていた。私はそんな垣内さんのなかにホーキンス先生

が生きておられるように感じた。

この取材を通して、柳城を作り上げてきた先駆者の並々ならぬ努力と、それに応えた卒業生に対する尊敬の念がいっそう深まった。このような貴重な歴史資料に今後柳城がどのように関わっていったらよいのかも考えさせられた一日であった。

追記：取材にご協力くださった垣内久子さんとご主人の垣内茂司祭に心よりお礼申し上げます。

## 資料

表 1. ホーキンス先生の生涯

年、年齢 (月日がわかるものは誕生日を考慮して年齢記載)		資料出典 (ダイアン・ディストラーさんが持ってきた資料を含む)
1891年10月 6 日	カナダ、ミーフォードで生まれる。	
年月不明	ハミルトン市に両親と共に転居。学齢期をハミルトン市で過ごす。	資料①
1918年 27歳	Anglican Women's Training College 卒業後、トロントの Trinity College（トリニティ神学校）に3年間在席。	資料⑦ トリニティ神学校については小林史郎『ルツ館の夫人宣教師たち』に書かれている <sup>9)</sup>
1920年 29歳	Deaconess House 卒業。伝道に出る。10月カナダを出発。	資料③の新聞記事と死亡記事 資料⑩
1921年 1 月 29歳	日本、東京到着。豊橋で働く。	
1925～1926 35～36歳	休暇中に幼稚園教諭課程取得。	資料⑦
1926年 36歳	Deaconess（婦人執事）	資料⑦
1927年 37歳	名古屋幼稚園教諭	資料⑦
1929年 39歳	岡谷 ハミルトンハウス。幼児教育と製糸工場女子労働者のために働く。	資料⑦
1937～38年 46～47歳	一時帰国	資料⑦
1938年 8 月 47歳	松本に戻る。	資料⑦
1940年 49歳	学校（柳城保母養成所）長に任命（1月25日）。佐々木主教による帰国命令がでる。	百年史115ページ（帰国1940年となっている）、資料③
1941年 50歳	4月帰国。11月1日からバンクーバー島で日本人のために働くことを要請される。	資料⑦
1946年 7 月 54歳	日系人収容所タシメが閉鎖され、ここでの仕事を終え、ハミルトン市にもどる。以後、詳細は本文中に記載。	アーキビストからのメッセージ
1947年 56歳	カナダを出発する。	資料③
1948年 57歳	日本に到着する。 「柳城保育専修学校」校長として就任	柳城学院百年史129-130ページ

「祈る人」ホーキンス先生

1953年 60歳	短大認可。初代学長となる。学長代理ミス・ミラー。 4 月 から 1 か 年 休 暇 で 帰 国。Anglican Women's Training College60周年に出席。	柳城学院百年史145ページ
1954年 5 月 61歳	日本に戻る。5 月 5 日、開学式。	
1959年 66歳	休暇で帰国。 ビクトリア州での Dominion Annual Meeting において日本での 働きを発表。柳城不在の間はミス・ハロビンと坂東先生が代理 伊勢湾台風（9 月26日）で、学校は体育館、庭木など被害を受ける。	資料⑩
1960年 67歳	「愛知県知事感謝状」「愛知県市立幼稚園」から表彰状。不在のため ミス・ハロビンが式典に出席。	資料⑩、当時の愛知県知事、桑原幹 根氏のタイプで打たれた推薦書コ ピー
1960年 3 月 67歳	休暇から日本に戻る。	資料⑩
1961年 6 月19日 (昭和36年) 70歳	2 月に年間報告横浜港からヒマラヤ号でカナダに帰国。	資料⑩
1973年11月 82歳	創立75周年、同窓会出席のため来日。	東京で撮った写真など
帰国後	ミーフォードに日本での生活や働きを話に行ったり、親戚を訪ね たりした。晩年はミーフォードで姪のアンディ・ブローウィンや クリス・ソーントンに助けられたようである。	資料③の死亡記事
1978年11月26日 87歳	昇天	資料③

表 2. General Synod Archives Anglican Church of Canada からの資料

文中 資料 記号	著者	雑誌名・巻・号・ 発行年・ページ数	タイトル等	内容
a	Miss Hawkins Miss Horobin	Living Message Vol.53, No.3, 1942年 3 月 p.72	At Home and Abroad Columbia	ポートアルバーニの状況報 告とホーキンス先生とハロ ビン先生の活動報告
b	Miss Hawkins Miss Horobin	Living Message Vol.53, No.5,1942年 5 月 p.135-136	At Home and Abroad Port Alberni, B.C.	ポートアルバーニでのホー キンス先生とハロビン先生 の活動報告
c	Miss Hawkins Miss Horobin	Living Message Vol.53, No.7,1942年 7 月 p.216-217	Work Among Japanese	バンクーバーからの活動報 告
d	Rev. W. H. Gale	Living Message Vol.54, No.6,1943年 6 月 p.186	Mission to Orientals in British Columbia	タシメでの活動開始の様子 が報告されている。
e	Mrs. John Gould	Living Message Vol.54, No.7,1943年 7 月 p.216-217	Orientals Mission in B. C.	タシメの状況報告
f	A. May Hilliard W.A. 西 カナダの副会長	Living Message Vol.54, No.11,1943年11月 p.380-381	Report of the W. A. Represen- tative on the Provincial Board of Missions to Orientals Japanese Work	聖公会のB.C.における活動 報告。タシメの現状報告。
g	Miss Hawkins	Living Message Vol.55, No.1,1944年 1 月 p. 6 - 7	News from Tashme, B.C.	1943年10月に書いたもの。 ホーキンス先生によるタシ メにきてからの詳細な報 告。



h	Miss Hawkins	Living Message Vol.56, No.1, 1945年 1 月 p.7	At Home and Abroad Tashme, B.C.	タシメにおける1944年の活動報告
i	Miss Hawkins	Living Message Vol.56, No.3, 1945年 3 月 p.72-73	Kootenay, B.C. (内容はタシメのクリスマスのことである)	1944年タシメにおけるクリスマスの様子を中心に報告
j	Miss Hawkins	Living Message Vol.56, No.6, 1945年 6 月 p.200-201	Juniors & Little Helpers Children of Tashme	タシメの子どもたちの生活についてカナダの子どもに向けて報告している
k	Rev. W. H. Gale	Living Message Vol.56, No.6, 1945年 6 月 p.187-188	Work Among the Japanese in British Columbia	1945年頃のタシメを始めとした BC のキャンプにおける活動報告。
l	A. May Hilliard	Living Message Vol.57, No.11, 1946年11月 p.424	Report of W.A. Representative on Provincial Board of Missions to Orientals	BC の多くの教会が閉められ、その後の宣教師の活動が書かれている

表 3. ホーキンス先生の大姪、ダイアン・ディストラーさん（ナイアガラ教区現司祭）持参の資料  
 ＊ほとんど出典が書かれていないため詳細不明。文献表示の都合上、通し番号をつけた。

文中 番号	内容の概略	備考
①	ダイアン・ディストラー司祭の創立105周年でのスピーチ	全文と全訳が『柳城学院百年史』p. 314-320に記載
②	ホーキンス先生の写真、親族のお墓の写真、死亡記事など	
③	1953年ごろの新聞記事 Says Anti-Communism High Among Japanese 同じページにホーキンス先生の死亡記事の切り抜き	
④	ナイアガラ教区 主教 John C. Bothwell からの弔電 Gordon Hawkins あて	今回は大姪のダイアン・ディストラー司祭と連絡が取れず、課題の一つだった家系図作成はできなかった。
⑤	Mission & the Anglican Church of Canada MSCC に関する資料	
⑥	出典不明。タイプライターで打たれたもの	ボーマン先生の帰国時のエピソードがある。
⑦	タイプで打たれたもの トリニティ・カレッジの名簿か 1941年、 <u>バンクーバー島で働くことを要請される</u>	これによって、ホーキンス先生が要請によってバンクーバー島に向かったことがわかった。
⑧	タイプで打ったもの。ホーキンス先生から誰かに宛てた手紙	
⑨	ホーキンス先生に関する資料を探している人がアーカイブに宛てた手紙	
⑩	ホーキンス先生による年間報告。1961年 2 月18日記載	
⑪	Living Message 1961年 8 月 p.6-8	退職の時期が迫ったことについて触れている

## その他の資料・文献

- 1) 柳城学院百年史編纂委員会『柳城学院百年史』柳城学院、2004年
- 2) 柳城学院『思い出』柳城学院、1998年
- 3) 日本聖公会中部教区歴史編修委員会編『かけはし—カナダ聖公会から中部教区へ—日本聖公会中部教区資料叢書 特集（教区成立90周年記念）』日本聖公会中部教区、2002年
- 4) 飯野正子『日系カナダ人の歴史』東京大学出版会、1997年
- 5) 新保満『石をもて追われるがごとく—日系カナダ人社会史』御茶の水書房、1996年
- 6) Sunahara, A. G (1981) *The Politics of Racism*. Toronto: James Lorimer and Company.
- 7) The the National Association of Japanese Canadians' (2005) *World War II Experience - Internment Centres*. Retrieved Sep 9 , 2008, from <http://www.najc.ca/thenandnow/experience1b.php>
- 8) Wikipedia, (29 August 2008) *Japanese Canadian Internment*. Retrieved Sep 9 , 2008, from [http://en.wikipedia.org/wiki/Japanese\\_Canadian\\_internment](http://en.wikipedia.org/wiki/Japanese_Canadian_internment)
- 9) ヨハネ小林史郎『ルツ館の婦人宣教師たち…明治から大正へ…』  
<http://www.nskk.org/chubu/church/nagano/history/shirou/y61rutukan.htm>  
2008年11月10日閲覧

## **The Act from Prayer of Miss F. B. Hawkins**

Nakane, Junko\*

フランセス・B・ホーキンス先生は、1941年、第二次世界大戦の戦局悪化により、カナダに一時帰国するが、その後、日本語に堪能であり幼児教育に精通していることから、カナダ聖公会から British Columbia 州の日系人のために働くよう要請された。1942年2月にはBC州の日系人はすべて海岸線から100マイル以内の防衛地域からの退去を命じられ、多くの者が収容所に移送された。ホーキンス先生は、ポートアルバーニ、バンクーバーを経て、1942年から内陸部の日系人収容所タシメに派遣された。幼稚園の立ち上げなど、そこでの具体的な活動について、カナダ聖公会アーカイブの協力により入手した資料から調査した。これらは第1部に述べられている。

また、第2部には、ホーキンス先生が1959年の卒業生に贈った黒いスーツについて書かれている。卒業式に慣例で着用していた黒いスーツを準備できなかった学生のことを心に留めてホーキンス先生が贈ったスーツは、今も卒業生のもとで大切に保管されていた。スーツをめぐっておよそ50年前の卒業生とめぐり合い、その生き方にホーキンス先生を見るようであった。

キーワード：フランセス・B・ホーキンス，日系人収容所，タシメ